

それで大会の懇親会の席上、晴子先生に「美しき人」は、やはり祖母のことでしょうかと申しあげると、先生はそうかもしれないねと笑みをうかべながらいわれた。

晴子先生より記念の色紙をいただいた。

別府晚秋清し山並清し海 晴子

と詠まれてあった。虚子の本名は「清」。虚子ご縁の富士屋に「清」の二文字入りの句をいただき、彼岸の祖母ノブ・父利夫もきっと喜んでいるにちがいない。

萩宿の虚子と祖母との物語 年寿

〈参考資料〉

大分県ホトトギス句会会報第八十号

是永勉著「別府今昔」大分合同新聞社発行

盆踊り口説(一)

## 鈴木主水白糸くどき

別府市北鉄輪二組

田中三生

(本人病気のため、安波利一代筆)

北鉄輪・鉄輪、否朝日地区盆踊り口説の第一人者であった柏本亀鶴氏(故人)が、明治四十二年七月十日発行、発行者・大阪市南区松屋町三十九、榎本松之助の口説の原本を所有していた。年代を経た古い原本なので、その写しを作成するのに大変苦勞し、一部中間不明も生じたが、ここに披露したい。

### 目次

- 一、鈴木主水白糸くどき
- 二、佐倉宗五郎くどき
- 三、白木屋お駒才三くどき
- 四、先代萩政岡忠義くどき
- 五、平井權八小柴くどき

(前分不明) 表に主水(もんど)が草履(ぞうり)夫(それ)と見るなり小職を招き 妾(わし)はこちらの白糸さんに どうぞ会(あひ)たい会(あは)しておくれ アイと小職は二階へ上り コレサ姉さん白糸さんよ 何処の女中か知らない方(かた)が 何かお前に用ありさうに 会ふてやらんせ白糸さんと 言へば白糸二階をおりる ヤンレー「妾をアアエ 尋ねる女中と言ふはお前さんかえ 何用でござる」 言へばお安は始めて会ふて 妾は青山主水が女房 お前見かねて頼みがござる 主水身分は勤の身分 日々のつとめをおろそかにすれば 末はご扶持(ふち)に離るる程に この道理をよく聞分けて どうぞ我が夫(つま)主水殿に意見をされて白糸さんよ せめてこの子が十才(とお)にもなれば 書夜揚づめなされうとままよ 又は妾が去られた跡で お前女房にならんすとても 何卒そののち主水殿に 三度来たなら一度は揚げて 二度と意見をして下さんせ 言へば白糸言葉に詰り 私(わし)は勤めの身分(みのうへ)なれば 女房持ちとは夢さら知らず ホンに今迄懇親なれど さぞや悪(にく)からふ お腹は立

とふ わしも之から主水様に意見しませう お帰りなされ 言ふて白糸二階へ上り 跡で二人の子供を連れて お安我が家へハヤ帰りける 遂(つい)に白糸主水に向ひ お前女房が子供を連れてわしを頼みに来ました程に 今日はお帰り 留めてはすまず (不明) 言へば主水はにっここと笑ひ 置ひておくれよ 久しいものだ 遂にその日は居続けなざる

ヤンレー「待とサアエ 暮せど帰りもしない お安子供を相手と致し も早その日はハヤ明けければ 支配方よりお使ひありて 主水身持ちがふらちだ故に 扶持も何にも召上げられる 後でお安 途方に暮れて 跡に残りし子供がふびんと思案しかねて当惑いたし 扶持に離れて永らく居れば 馬鹿なたわけと言はれるよりも ヤンレー「武士のアサエ 女房ぢや自害をせうと二人子供を寝かしておいて 硯とり出し墨すり流し 落ちる涙が硯の水に 涙止めて書おきいたし 白き木綿で我身を巻ひて 二人子供の寝たのを見れば 可愛く(さ)で 兒(こ)に引かされて思い切り刃(やいば)を逆手(さ)かて)に持ちて グッと自害の刃(やいば)の下に 二

人子供はハヤ目が覚(さ)めて 三ツになる子は乳にと  
すがり 五ツなる子は背中にすがり コレサ母(かあ)  
さんノウ母さんと 幼な心でハヤ泣くばかり 主水 そ  
れとは夢にも知らぬ女郎や立ちいでほろく酔で 女房  
ぢらしの小唄で帰り 表口より今戻ったと 子供二人は  
驅出し乍ら モーシ父様(ととさま) お帰りなるかな  
ぜか母さん今日限り 物も言はずに一日お寝る ホンニ  
今迄いたずらしたが 御意は反(そむ)かぬノウ父様  
(ととさま)よ 何卒詫びして下されましょと 聞いて主  
水は驚き入りて 合の唐紙さらりとあけて 見ればお安  
は血汐にそまり わしが心の悪ひが故に 自害したかよ  
不びんな事よ 涙乍らに二人が子供 膝に抱き上げ可愛  
や程に 何も知るまいよく聞け坊や 母は此の世の暇  
(いとま)ぢや程に 言えば子供は死骸(がい)へすが  
り モーシ母さんなせサウなした 私二人はドウしませ  
うと 歎(なげ)く子供を振り捨て置いて 旦那寺へと  
急ひで行きて

ヤンレエー「戒名サアエ 貰ふて我が家に帰り 哀れ  
なるかや女房の死骸 筵(こも)に包んで背中におふて

三ツなるを前にとかかへ 五ツなる子を手に引き乍ら

行けばお寺で葬りまする 是非もなく我家へ帰

り女房お安の書置き見れば 余り勤めの放らち故に 扶

持も何も取り上げられる 又は門前払ひと読みて さて

も主水は仰天いたし 子供泣くのをそのまま置ひて 急

ぎ行くのは白糸かたへ 是はお出でか主水様よ したが

今宵はお帰りなされ 言へば主水はその物語り 襟(え

り)に掛けたる戒名出して見せりや 白糸手に取り上げ

て わしが心の悪ひが故に お安さんへも自害をさせた

去ればこれから三途の川も お安さんこそ手を曳きま

せう 主水の覚悟を白糸とどめ わしとお前と心中して

は お安様への言ひわけ立たぬ お前死なずにながらへ

しゃんせ 二人子供を成人させて 回向(えこう)頼む

よ主水様よ言ふて白糸一と間へ入りて あまた朋輩(ほ

うばい)女郎衆を招き ゆづり物とて櫛(くし)こうがいをやれ

ば くれれば小春は不思議に思ひ コレサ姉さんどうした

訳ぞ 今日を限りてゆづり言ひ出し、それにお顔もすぐ

れもしない 言へば白糸 よく聞け小春

ヤンレエー「俺(わし)はサアエ幼き七ツの年に 人

## 「安政の大地震」

安部 和也

に売られて今此の里に つらい勤めもハヤ十二年 勤め  
ましたよ主水様に 日頃三年こん親したが 今度わし故  
ご扶持もはなれ 又は女房の自害をなさる それに私が  
生存（ながらえ）おれば お職女郎の意気地が立たぬ  
死んで意気地を立てねばならぬ 早くそなたも身なりに  
なりて わしが為にと香花頼む 言ふて白糸一ト間へ入  
りて 口の内にて唯一言と涙乍らにノウお安さん 私故  
こそ命を捨ててさぞやお前は無念であるが 死出の山路  
も三途の川も共に妾（わたし）が手を曳きませうと 南  
無といふ声此の世の別れ あまた朋輩皆立寄りて 人に  
情の白糸さんが 主水さん故命を捨てる 残り惜し気に  
朋輩達が 別れ惜しみて歎く（なげ）くも道理 今は主  
水も詮方なさに 忍びひそかに我家に帰り子供二人に譲  
りを置いて すぐに其のまま一間に入りて 重ねくのの  
身の誤りに 我と我が身の一生すつる 子供二人は取り  
残されて 西も東もわきまへ知らぬ 幼な心は哀れなも  
のと あまた情死（しんぢう）もあるとはいへど 義理  
を立ちたり意気地を立てて 心合ふたる三人共に聞くも  
哀れな話でござる ヤンレエー

我が家の菩提寺臨濟宗海宝山崇福寺之過去帳を調査さ  
せてもらっている時、諸記録のなかに安政の大地震に関  
する古文書を発見、早速古文書辞典を片手に独学で解読  
に挑戦、長い日数を要してヤット意味が通じるほどに解  
読できたので発表いたします。

（著者読み下し）

一安政申寅元年十一月五日未ノ下刻 古今未曾有之大地  
震 居宅土蔵等所々倒レ天地震動山鳴海川水あふれ世  
界も滅するかと皆々臆魂を飛し 老若男女押倒踏倒し  
親を呼び子をたずね走り出申候 然ル処別府濱脇之男  
女六七步當山え走り込誠ニ大そうどう 庫裏方丈少し  
のすき間もなく実には芝居の棧敷ニ群集致候様ニ而 夜  
通し念仏或ハ誦經今も世界滅盡するやと心配いたし夜  
を明し候 夫ヨリ六日早天より男子の分はそろそろ引